



2013年度
バードリサーチ研究集会
in 熊本 荒尾干潟
要旨集



ズグロカモメ (*Larus saundersi*)

日時: 2013年4月27日(土) 13:00~17:00
会場: 荒尾市中央公民館 視聴覚室
共催: NPO法人バードリサーチ
日本野鳥の会 熊本県支部
後援: 荒尾市、エコパートナーズあらか市民会議

2013年度 バードリサーチ研究集会
in 熊本 荒尾干潟 プログラム

日時:2013年4月27日(土) 13:00~17:00

会場:荒尾市中央公民館 視聴覚室

13:00

開会挨拶

来賓挨拶

第1部 講演会 13:10~14:50

1. 13:10-13:50

「荒尾干潟とラムサール条約」

安尾征三郎:日本野鳥の会 熊本県支部

2. 13:50-14:30

「熊本県内干潟域に飛来するシギ・チドリ類」

高野茂樹:八代野鳥愛好会

3. 14:30-14:50

「全国的に見た荒尾干潟と有明海ーシギ・チドリ調査からー」

守屋年史:NPO法人バードリサーチ

休憩14:50-15:10

第2部 鳥類に関する研究発表 15:10～17:00

(1) 15:10-15:30

「小笠原ヒッチハイクガイド～種子は海鳥に乗って旅をする～」

青山夕貴子:NPO法人バードリサーチ

(2) 15:30-15:50

「長崎県生月島における小鳥類の春の渡り」

馬田勝義:日本野鳥の会 長崎県支部

(3) 15:50-16:10

「九州地方のカワウ ーどこにどれだけのカワウがいるのかー」

加藤ななえ:NPO法人バードリサーチ

(4) 16:10-16:30

「モニタリングから実践的な保全の取り組みへの展開

-クロツラヘラサギの内陸湿地の利用と保全のための新たな課題-

富田宏・服部卓郎:NPO法人ふくおか湿地保全研究会

(5) 16:30-16:50

「川にすむイカルチドリとコチドリの生活」

笠原里恵:NPO法人バードリサーチ

閉会 17:00

荒尾干潟とラムサール条約

安尾征三郎(日本野鳥の会 熊本県支部)

荒尾干潟の保全、ラムサール湿地登録に尽力された日本野鳥の会 熊本支部の安尾さんに荒尾干潟についてお話していただきます。



図: シロチドリ

熊本県の干潟域に飛来するシギ・チドリ類の渡り

高野茂樹(八代野鳥愛好会)

熊本県のシギ・チドリ類の主な飛来地は、有明海の荒尾干潟、白川河口一帯、八代海の不知火干潟、氷川河口、球磨川河口などがあり、いずれもモニタリング飛来地1000のシギ・チドリ類のコアエリア調査地とされている。熊本県のシギ・チドリ類飛来地における飛来個体群を比較し、飛来地の特徴と季節による飛来の傾向について、また八代海球磨川河口におけるシギ・チドリ類の季節変化と干潟利用の傾向について報告する。

1) 熊本県飛来地の飛来状況

荒尾干潟、白川河口、不知火干潟、氷川河口、球磨川河口において2011年秋期から2012年春期までに記録されたシギ・チドリ類の種類は37種であった。渡りの季節別に見ると、春期は荒尾干潟においてオオソリハシシギ、トウネン、キョウジョシギとミュビシギなどが他の飛来地に比べて飛来数が多く、白川河口ではタシギとタカブシギが18-35羽の飛来で他飛来地には飛来しない種であった。クラスター分析では八代海の3つの飛来地(不知火干潟、氷川河口、球磨川河口)は近くにグループ化された。全飛来地において春期、秋期、冬期の資料を用いてMDS分析を行うと、2011年秋期の氷川河口を除いて、類似度40%でまとめられ、冬期の5飛来地のグループ、荒尾干潟の春期と秋期のグループ、白川河口の春期と秋期のグループそして八代海の春期と秋期のグループに分けられた。冬期は有明海・八代海で似た種群が越冬し、春期と秋期には干潟毎に利用する種群が異なっているようだ。

2) 球磨川河口の飛来状況

球磨川河口において2008年秋期～2012年冬期の右岸・左岸毎の種・個体数/日を用いたMDS(多次元尺度構成法)による解析では、季節毎にグループされ、各季節では右岸と左岸で多少の差異が認められた。平均飛来種数は春期13.1種、秋期13.8種そして冬期5.7種で春期と秋期は差はなかったが、冬期は少なかった。

球磨川河口で観察されるシギ・チドリ類について月ごとに飛来数(2002年-2006年の各月最大飛来個体数)をグラフ化すると飛来タイプが春型、秋型、春秋型、越冬型に分けられた。春型はチュウシャクシギ、秋型はトウネン、オバシギ、ソリハシシギ、春秋型はアオアシシギ、キアシシギ、オオソリハシシギ、ホウロクシギなど、そして越冬型はシロチドリ、ダイゼン、ハマシギであった。

右岸・左岸別の飛来個体数/日を季節別に見ると、春期は右岸461.4羽、左岸234.4羽、秋期は右岸83.6羽、左岸103.0羽そして冬期は右岸770.7羽、左岸237.7羽であった。春期と冬期は右岸と左岸で有意差が認められ($p < 0.05$, t-test)、右岸側が多かった。季節毎の経年変化については、春期と冬期は右岸、左岸共に増加し、秋期は左岸は変化がなく右岸では減少傾向であった。

3) おわりに

シギ・チドリ類の渡りでは、熊本県においても地理的な位置や季節によって飛来する個体群が異なっていた。球磨川河口干潟では季節によっては右岸と左岸で利用する個体数や種に違いがあり、1つの飛来地でも利用する生息環境を違えていることが推測された。

シギ・チドリ類はその飛来地をたまたま利用しているのではなく、種群毎に選択して特定の干潟・湿地を利用をしていることを示唆しているようだ。シギ・チドリ類保全のためには、大小を問わず現在利用している飛来地の環境を維持していくことが重要であることを改めて感じる事ができた。

全国的に見た荒尾干潟と有明海 ーシギ・チドリ調査からー

守屋 年史 (NPO法人バードリサーチ)

シギ・チドリ類調査は、主体を変えながら30年以上続く全国的な調査である。2004年度から環境省事業モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査に引き継がれ、当会は2008年度から事務局を務めている。

この調査は、全国に100カ所以上の調査サイトがあり、多くの一般ボランティアによって調査が支えられている。継続的なモニタリング調査の結果は活用され、荒尾干潟のようにラムサール登録の基礎資料や、絶滅危惧動物の根拠資料となっている。

今回は、調査体制、長期モニタリング調査の重要性にふれるとともに、調査の結果からみえる有明海や荒尾干潟のシギ・チドリ類の状況について報告する。

○モニタリング調査体制

調査は、春(4～5月:繁殖のため北に向かう)、秋(8～9月越冬のため南に向かう)、冬(12～2月:日本国内で冬を越す)の年3シーズンに実施されている。期間中に複数回調査を行いその各種の最大数を合計し、最大渡来数としている。また一斉調査日という日を設け、全国で一斉に個体数を数える調査を行なっている。

○長期モニタリング調査

モニタリング調査で最も重要なことは、長く同様の調査を継続していくことである。基になるデータがあれば、環境変化が起こっても比較できる。また将来的な変化についてもある程度予測することができる。

そのためには、無理のない調査を設定することや、仲間と共同して調査する体制をつくることが望ましい。また、拠点となる場所ができるのは、調査に関心のある人に接点を設けるという点で非常に有効である。調査グループがあると、なお継続しやすい。

○シギ・チドリ類の状況

シギ・チドリ類の多くは、極北から東南アジア・オセアニアを往復する旅鳥である。国内では春期に最も多く観察される。有明海の調査サイトは7サイト(全国の約5%)であるが、全国の約20%の渡来数が記録されている。しかし、シギ・チドリ類は1970年代と比較すると大きく減少し、2000年以降もゆるやかな減少傾向が引き続き続いており、生息環境の保全が重要な課題となっている。

荒尾干潟は、春期にオオソリハシシギ、秋期にキアシシギの種構成に対する割合が高い。シロチドリも多く、有明海全体と比較しても特徴的で、有明海の中での環境の多様性を高めていると考えられる。

ほかに有明海での各種の個体数変化についても報告する。

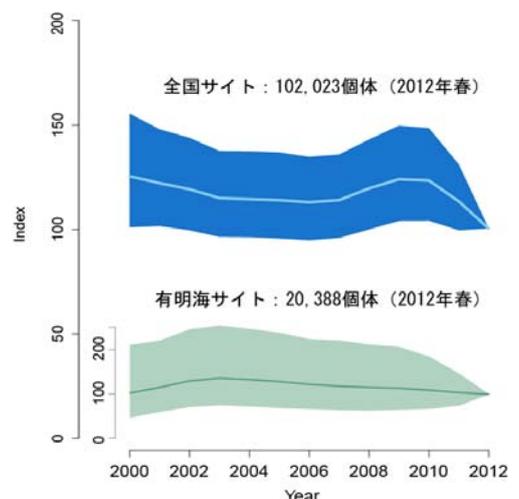


図: 春期のシギチドリ類の最大渡来数の変化. 全国(上)と有明海(下). 2012年の結果を100としている。

小笠原ヒッチハイクガイド ～種子は海鳥に乗って旅をする～

青山 夕貴子(NPO法人バードリサーチ)

東京から南へ1000km、東京・竹芝桟橋から25時間半の船旅を乗り越えた先に待っているのが、小笠原諸島です。小笠原諸島には在来のほ乳類はオガサワラオオコウモリのみ、ヘビもいません。小笠原諸島は誕生以来他の陸地とつながったことがなく、飛ぶことができない多くの生き物はこの島にたどり着くことができなかつたからです。陸生の捕食者がいないため、海鳥の大規模な繁殖地となっています。これまでに約20種の海鳥の繁殖が記録されています。

残念ながら、現在の小笠原諸島は数多くの外来種問題をかかえています。現在小笠原諸島で人が住んでいるのは父島、母島、硫黄島、南鳥島のみですが、戦前にはさらに10余りの島に人が居住していました。ある程度の大きさのある島で唯一、急峻な地形やアクセスの悪さのためにこれまで一度も人の居住した歴史がなく、いかなる外来ほ乳類も記録されていない島が、南硫黄島です。世界でも数少ない、原生の自然を今に伝える無人島です。2007年、25年ぶりに行われた南硫黄島の学術調査で、前回の調査ではみられなかつたシンクリノイガという外来植物が広く分布していることが確認されました。シンクリノイガはとげのある果実をもつ付着散布型の植物です。

鳥による被食散布は数多くの研究者によって注目され、研究が積み重ねられていますが、付着型種子散布の研究はほとんど行われていません。私は小笠原諸島で広く繁殖する海鳥が付着型種子散布によって島間の種子散布を行っている可能性を検証しました。

まず小笠原諸島の海鳥繁殖地で親鳥を捕獲し、種子が付着しているかどうかを調べました。対象としたのは小笠原の主要な繁殖種であるクロアシホウドリ、オナガミズナギドリ、アナドリ、カツオドリの4種です。その結果、どの種でも16-32%の個体には種子が付着していました。9種の植物の種子が検出され、中でももっとも多かったのがシンクリノイガです。シンクリノイガを含む4種が外来植物でした。また海水と同程度の塩水に浸した種子を発芽させたところ、種によっては若干の発芽率の低下がみられましたがいずれも致命的なものではなく、海鳥の行動に伴う海水の浸水の影響は小さいということが示唆されました。さらに海鳥に特に多くの種子が付着していた植物種の小笠原諸島内での分布を調べたところ、いくつかの植物種については海鳥の繁殖分布と相関関係があることが示されました。これらの結果は、海鳥は小笠原諸島の植物の種子散布者として機能しており、外来植物の分布拡大にも貢献してしまっているということを支持しています。

発表では本研究の成果をお話ししつつ、小笠原諸島の海鳥についてご紹介できたらと思います。

長崎県生月島における春の小鳥類の渡りについて

馬田 勝義(日本野鳥の会長崎県支部)

はじめに

長崎県生月島は、九州本土の北西端に位置し、南北10km、東西3.7kmで一番狭いところは400mしかない。その地理的位置と南北に細長い地形的特徴により、多くの渡り鳥が観察できる。1992年から観察と標識調査を実施しており、これまで観察された鳥類は約190種。ここでは島の最北端の大バエ草原の中にある灌木の周辺で実施した2008年からの標識調査の結果を中心に春の小鳥類の渡りの状況を紹介する。

放鳥数の多い上位5種

もともと放鳥数が多かった2010年は、3月27日から5月30日までの31日調査し、51種、新放鳥数1774羽だった。新放鳥数の上位5種はメジロ466羽・26%、ヒヨドリ371羽・21%、センダイムシクイ283羽・16%、シロハラ157羽・9%、エゾムシクイ75羽・4%だった。

回収記録

種名	性	齢	放鳥場所	回収場所	放鳥日	回収日	経過日数
ヒヨドリ	雌	成鳥	長崎県生月島	韓国釜山市	20080427	20080504	7日
メジロ	雄	成鳥	長崎県生月島	岡山県赤磐市	20080506	20100305	1年9ヶ月
シロハラ	雄	幼鳥	長崎県生月島	新潟市関谷海岸	20101120	20111028	11ヶ月

主な鳥類の渡りの時期

ヒヨドリは4月中旬～5月下旬、コルリは4月下旬～5月上旬、シロハラは3月上旬～5月上旬、エゾムシクイ・センダイムシクイ・キビタキは4月中旬～5月中旬、オオルリは4月中旬～5月上旬、メジロは3月下旬～5月下旬。

放鳥時間

一日中放鳥されるが、特に早朝と夕方に多い。ウグイスは午前中と15時以降、エゾムシクイは14時以降、センダイムシクイは8～10時と14時以降で、特に18時台に多い。シロハラは6時から13時までの日中に多い。放鳥時間をみると、ムシクイ類は夕方に島の北端に集まってくるのがわかる。

観察数の少ない種

観察する機会が少ない種も毎年放鳥されるので、定期的に渡っていることがわかる。1シーズンの最多放鳥数は、キマユムシクイ16羽、シロハラホオジロ8羽、カラアカハラ6羽、キマユホオジロ4羽、ムギマキ・亜種チョウセンウグイス各2羽、ノジコ・コホオアカ・チョウセンメジロ・ギンムクドリ各1羽。なお、ソウシチョウも放鳥されるが、海を渡る個体もいるのだろうか。

九州地方のカワウ

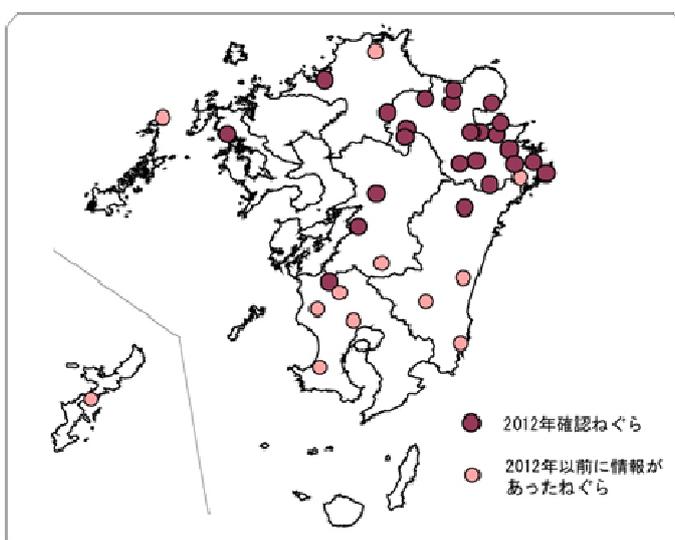
—どこにどれだけのカワウがいるのか—

加藤 ななえ(NPO法人バードリサーチ)

カワウはカツオドリ目ウ科に属する。集団性が強い鳥である。日々の採食や就罅では数羽から数万羽の群れを形成する。ねぐらができる場所の条件は、「人などの外敵が近寄りにくいこと」、「水辺にあること」などが挙げられる。

カワウの採食場所は海水域から淡水域にまで及ぶ。一日におよそ300から500gの魚を食べていると推測されている。特に決まった魚種を選択的に食べているのではなく、季節ごとにそれぞれの地域で採り易い魚を多く食べていると考えられている。

1960-70年にかけてカワウは全国的に個体数を激減させた。その原因は開発による環境改変や汚染などであったと考えられている。その後、河川の水質が改善されたことなどで、カワウは急速に個体数と分布域を回復させてきた。それに伴い、カワウによる水産被害や樹木の枯死被害などが訴えられるようになってきた。関東や中部、近畿などの地方では、最近では個体数の増加が頭打ちになってきている。ただし、それらの地方に隣接する東北や中国、四国地方ではカワウの新たな分布や個体数の増加が報告されるようになってきた。今後、九州地方でもカワウの増加が予想される。



図：九州のカワウねぐら分布

九州のカワウの分布は、まだ十分に把握されていない地域が多い。大分県は、一昨年より集中的に調査をおこなったことからカワウのねぐらやコロニーの位置、利用個体数の季節変化などが分かるようになってきた。

カワウの行動範囲は広い。ねぐらと採食地や休息地との日々の移動のほか、季節によってねぐら場所を大きく変えるものが多い。移動を調べる方法の一つに標識された足環(カラーリング)の観察がある。九州地方での足環の観察には、島根県から熊本県、滋賀県から福岡県などの例がある。広く情報を求めているので、観察した場合は知らせてほしい。(kato@bird-research.jp)

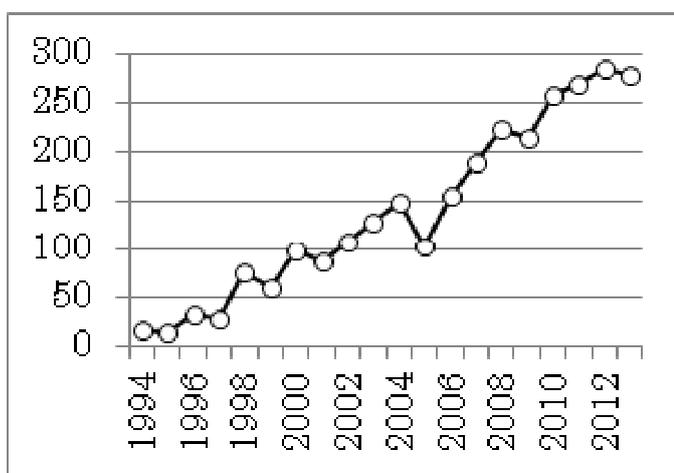
モニタリングから実践的な保全の取り組みへの展開 ークロツラヘラサギの内陸湿地の利用と保全のための新たな課題ー

富田宏・服部卓朗(NPO法人ふくおか湿地保全研究会)

東アジアの河口域、沿岸の地域に局所的に生息するクロツラヘラサギ(*Platalea minor*)は、アジアの河口域、沿岸域の環境保全のシンボリックな存在であり、1990年代から国際的な調査、保全の取り組みがなされてきた。こうした取り組みはアジアの絶滅危惧種の保全の中で最も成功した例の一つだと考えられており、1996年に実施された調査では推定総個体数が400羽だったが、2013年1月に実施された調査では2725羽が記録されている。一般的に、2000個体という数字は緊急的な保全が必要かどうかを判断する一つの基準であり、IUCNのレッドリストにおけるクロツラヘラサギのランクは絶滅危惧Ⅱ類に降格している。

しかし、クロツラヘラサギの主要な越冬地で越冬個体数が目に見えて増加しているわけではなく、主要な越冬地である台湾、そして日本でも越冬個体数の増加率は減少傾向にある。これはもちろん繁殖地の問題、広域的な分布域の変化、機会的な渡りルートの変動などの要因が影響しているが、同時に各地の越冬地における“収容力”もまた重要な要因である。それぞれの越冬地における満潮時の休息場(ねぐら)、採餌場所の質、人の干渉の程度、釣り糸やゴミによる負傷といった越冬地の条件は、それぞれの越冬地で養うことのできる個体数に影響を与える。そのため、総個体数が2000羽を安定的にクリアするようになった後、繁殖地、中継地、越冬地で、収容力をどう伸ばしていくのが重要な課題である。私たちは今、モニタリングから実践的な保全の取り組みへと保全のターゲットをシフトし、クロツラヘラサギの生態、環境利用を踏まえた“越冬地の収容力”について考えていかなければならない。

今回、私たちはこうした問題へのアプローチとして、博多湾で越冬するクロツラヘラサギの野外調査から明らかになったクロツラヘラサギの夜行性/昼行性のスイッチ、内陸湿地(ため池や水路)の利用、そして今後の保全上の課題について報告する。



図：日本列島で越冬するクロツラヘラサギの個体数。[Hong-Kong Bird watching society 公表データより作図]

川にすむイカルチドリとコチドリの生活

笠原 里恵(NPO法人バードリサーチ)

●河川に棲むチドリの代表格

日本でみられるシギ・チドリ類の多くは、渡りの時期に日本を通過していく旅鳥であり、その多彩な容姿や行動には、多くの人がひきつけられる。一方、日本で繁殖するチドリ類もいる。例えば、河川を主要な生息地とする、イカルチドリとコチドリである。この2種の外見は類似していて、羽色は、頭頂部から背面までが茶褐色、腹部は白、過眼線は黒味があり、目の周りに黄色い縁取りがある。二種の外見の違いとして特徴的なのは体長(イカルチドリ:19-21cm, コチドリ:14-17cm)と目の周りの黄色の明瞭さ(コチドリの方が明瞭)である。色彩は地味だが、それゆえに、砂礫地上に作られた巣で抱卵する姿は、見事に風景に溶け込む。営巣環境はどちらも草のまばらな河川等の砂礫地を好み、河川水辺の国勢調査では、河川の自然度や健全度の評価にも用いられている。

●実は減少が懸念されている

都道府県が作成している県別RDBにおいて、イカルチドリは26都府県、コチドリは14都府県で絶滅危惧IおよびII類などに指定されている。幸いにも環境省製作のRDBにはまだ掲載されていないが、今後その可能性がないとはいえないし、RDBに名前がなくとも、減少が懸念されている種は多い(例えば、スズメ)。減少している個体数の回復や維持のためには、減少の要因の理解や、種の生態、生活史についてよく知る必要がある。今回の発表では、河川で生活するイカルチドリとコチドリについて、彼らが必要とする環境や直面している問題についてお話をしたい。

●砂礫地と増水とチドリ類

都道府県のRDBで挙げられている二種の主な減少要因は、生息に適した河原(砂礫地)の減少である。これらの種が好む露出した砂礫地が維持されるには、定期的な攪乱が必要である。河川の増水は、重要な攪乱の一つであり、砂礫地上の植物を流し去り、時に砂礫地の礫構成や中洲の配置をも変える大きな力である。しかし、増水は、しばしば河川の氾濫をもたらし人間の生活を脅かしてきた。河川の上流に造られたダム、流れの途中で配置された堰によって、歴史的に川を流れる水の量が調節され、護岸工事や川の直線化が行われてきた結果、水害は大きく減ったものの、中洲には草や樹木が茂り、露出した砂礫地が減少してきたと考えられる(砂利採取による地形変化も重要な要因である)。河川の増水は、チドリ類の生息適地の創出や維持にとって重要な機能といえる。

●人間活動の影響

生息適地の減少以外にも課題がある。チドリ類の生息や繁殖が、人間のレクリエーション活動によってしばしば脅かされてしまうことだ。彼らの地味な容姿と砂礫地上の巣は、その隠蔽性の高さから、たいていの人々に気づかれない。愛犬の散歩、車を砂礫地に乗り入れてのバーベキューや釣りまで、河原での人々の楽しいイベントの陰(正しくは足元)で、卵が破壊され、親鳥と引き離されたヒナが衰弱死、悪くすれば轢き殺されてしまう事態が生じている。接近してきた脅威に対して、その注意をそらすために親鳥が傷ついたふりをする傷行動も、捕食者であるカラスやタヌキには効果的かもしれないが、その行動の意味が分からない人間相手では、親鳥の懸命な擬傷行動も効果は非常に薄いと思われる。河川における人間と野生生物の共存を図るうえで、河川の利用者に、砂礫地にいる生き物の生態や生活史を知っていただくことは重要であろう。



2013年度
バードリサーチ研究集会
in 熊本 荒尾干潟 要旨集
発行日:2013年4月27日
編集:守屋年史
発行:NPO法人バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9